

比庵佳境の会

清水比庵の人物表現

三才〜三九才の絵手紙から



清水比庵先生の絵手紙 (横手、青森、魚崎時代) 比庵芸術のプロローグ

日本絵手紙協会公認講師
浅田美知子

摘は、実に明解で、以前から比庵先生の絵手紙と最近の絵手紙との違いを感じながらそのままにしていた私のずぼらな姿勢を正し、絵手紙とは何かをしっかりと見つけてみようと思わせてくれました。

一 はじめに

「あらためてお礼を申します。夏目漱石の絵入りの葉書や若い時の清水比庵の葉書など、いずれも文字が多くて、その文面の説明として絵が役立つようなものには不自然さがなく「絵手紙」と呼ぶに受け入れ易いのですが、今の絵が中心になって文字が付け足されるような手紙は、小生には、どうも「絵手紙」という言葉は使いにくく、しつくり来ないという感があります。「手紙絵」とでも呼ぶべきかな、などと思いつつゴタゴタした気持ちになってしまつて收拾のつかぬ気持ちになってしまうのです。」

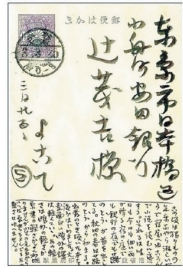
二 清水比庵画像集との出会い

この度、清水固氏が纏められた比庵先生の銀行員時代の絵手紙の画像集を改めて拝見させて頂きました。すると、その葉書一枚一枚にカメラアイを想わせる画とともに情緒豊かに語られる風土風物への心象が面白くて、とても惹きつけられました。百年前の景色と暮らしたが、今でも色褪せず記録写真のように残され、葉書の絵と文章に接すると

これは、昨年刊行された私の絵手紙の拙本を恩師の志村正雄先生にお送りした時、先生からいただいたお手紙の一文です。文学という全ての文学に造詣が深く、その上、アメリカ文学研究の権威である志村先生はこよなく清水比庵先生を敬愛し、一読齋という雅号で「自身も文人画をお描きになっています。志村先生の「絵手紙」という呼称へのご指



浅田美知子著
大きな紙にかく絵手紙



くりにや川



この頃は獨りものの気楽なやら淋しいやらで宿屋へねころんで小説を読むに適當する。それは昨日も今日も細かい雨が降る宿の庭でも銀行の庭でも露のとうが首を出して。秋田の春は露のとうがら始まる。出発のとき頂いた本を読みはじめました。大変面白い。あつはあつと。あつはあつと。あつはあつと。あつはあつと。

注 比庵は安田銀行入社二月初めに東京本店から秋田県横手町支店に転勤になり最初は家族と離れて横手の宿屋に泊まっていた。

ライブでその場所を見ているような気さえ感じました。

比庵先生は安田銀行東京本社に入社後、大正三年三月、秋田県の横手支社に転勤。絵手紙の第一号は、ひとまず家族と離れて泊まっていた横手の宿から東京の安田銀行に勤務する辻茂吉氏に宛てたものでした。(これ以降二人の手紙交換は飽くなく続きます。)

画は横手のくりや川の辺りの風景。文章は家族から離れた比庵先生の心情が、

「この頃は獨りものの気楽なやら淋しいやらで宿屋へねころんで小説を讀むに適する。それには昨日も今日も細い雨が降る宿の庭でも銀行の庭でも路のとうが首をだしている。」

と記され、画の風景と比庵先生の心情が一体となって静かに浮かび上がり、その時の情景が映像のように見えてくるのです。

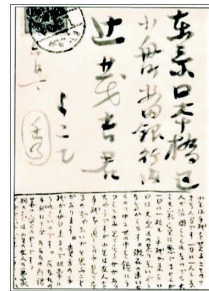
この時代は、官設鉄道路線が日本国中によくやぐどにか引かれたところで、まだまだ汽車での移動は時間がかかり、任地の横手にはとてつもない遠隔地に降り立った気がしたことでしよう。

どんな情報も現代のように届きにくく、行き来さえ困難な交通事情の中で、比庵先生は住処となったその土地の特有な風習や事柄、人の気質、心と心の触れ合いなどを葉書画文に載せて他の地へと送り届けたのです。言うならば、地方ロケのドキュメンタリー。比庵先生はプロデューサー兼カメラマン兼リポーターのようなものだったのではないかと考えるのです。

そして、大正三年六月一日の絵手紙(辻氏宛て)に、

「小生は手紙をもらうことのできな人間です。一日に一人も友人が訪問してくれなくても大した寂寞は感じませんが一日に一枚も手紙が来ない日は大変もの足りないやうな気がします。(略) 貴方の手紙が毎日来るので非常にうれしいのです。貴方の手紙は丁度あ

大正三年六月一日(三十二歳)



小生は手紙を貰うことのできな人間です。一日に一人も友人が訪問してくれなくても大した寂寞は感じま

せんが一日に一枚も手紙が来ない日は大変もの足りないやうな気がします。漱石の書いたものの中に世

桐の花 S



の中を鏡にうつしてのみ見て居るのじゃないかと思うことがあります。貴方の手紙が毎日来るので非常にうれしいのです。貴方の手紙は丁度あなたの所謂母の實のようです。桐の花は小生の友人の画家が面白いから写生してみろといひましたから写生してみましたのです。

なたの所謂母の實のやうです。」

と語られているように、お互いの手紙のやりとりは日常のなくてはならないことであつたようです。そして、それらは、ただの情報交換や表敬訪問に留まらず、文学論を闘わせたり、共に俳句の修練をしたりして、互いの見識、学識、人間性を深め合つたのかもしれない。

三 絵手紙に見る比庵芸術の原点

この絵手紙画像集に残されているのは大正三年〜大正九年、三二才〜三九才に辻氏に送つた多くの絵手紙です。

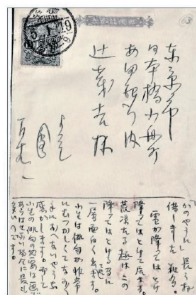
その文章は読みやすく、オシャレで、面白く、大概は楽しい気分にくれるものです。そして、それらを楽しみながら読み進んでいくうちに、私はある大発見に目が釘付けになったのです。それは、やがて歌人となられる比庵先生の原点を示すもので、辻氏への語りの中にあつたのです。

数件、ピックアップいたしましたしよ。

大正五年一月十九日、「小生は俳句が非常にむづかしくてなかなか手におへないやうな感じがします。而して小生の俳句の必要は画であらはずな場合にも多いのです。」

といながらも俳句を詠み続け、大正五年四月一日、「これからはかうして俳句をご覧に入れますからい、かげんたまつ

大正五年一月十九日(三十四歳)



「かのように」長く拝借しました。難有。

雪が降ってはとけ、降ってはとけて居ます。荒涼たる趣はこの降ってはとける間に一層面白く出て居ます。小生は俳句が非常にむづかしくてなかなか手におへないやうな感じがします。而して小生の俳句の必要は画であらはずな場合にも多いのです。



たところでご批評下さい。」

とあり、俳句を嗜む辻氏の影響を想わせる手紙が続いていました。

ついに、大正六年三月二十一日の葉書に、「此頃は句を止めて歌にとりかゝり居候。小生は初から句よりも歌の人格に候。但しどうしても句でなければならぬところが、此の場合には俳人となり候。」

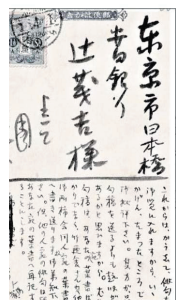
とあり、俳句をかきながらも、歌の方に傾倒して行く様子が記されていたのです。

ここが歌人たる原点だったのか、と思つてもみなかった事柄にある種の衝撃を覚えまして。

それまでは比庵先生の絵手紙と文人画は別物と思つていたのですから。

また、描かれていた画は、とても自然な筆

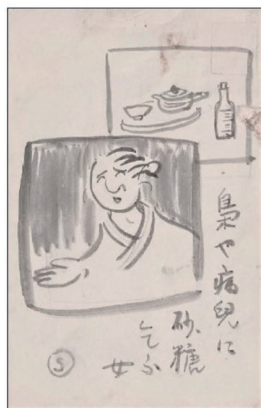
大正五年四月一日(三十四歳)



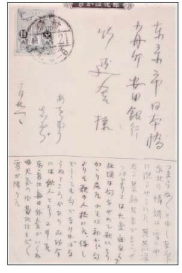
これからはかうして俳句を御覧にいれますから、いゝかげんたまつたところでご

批評下さい。其方が只句稿を送るよりも趣味があるかと思ひますから。尤も句稿はあなた宛の葉書ばかりでなく、竹蘆舎さん其他御所柿会同人宛の葉書へ書き送ります故ご承知ください。但、他の人宛の俳句は皆あなた宛の葉書へ再記することにします。

ほけ立つて 雪乾く橋の 人馬散 鼻や 病兒に砂糖 乞う女 S



大正六年三月二十一日(三十五歳)



つまらぬつまらぬと申しながら東北の情調は雪の中に混じるように候。其荒涼たる景趣其者が

考へやうによりては大変面白く候。此頃は句を止めて歌にとりかゝり居候。小生は初から句よりも歌の人格に候。但しどうしても句でなければならぬところが、此場合には俳人となり可申候。東京は毎日外套がいらぬ好天氣の由、當地はまだまだ雪が降り候。

町通を塞ぐ大きな雪山に向いてあるく朝に夕に S



致で、どれもあたたかく、比庵先生の伝えた心が溢れています。実は画の原点も、この時代の絵手紙にあると言えるのではないかと思えます。

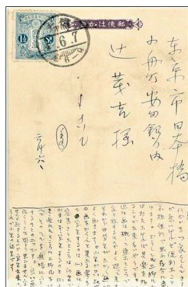
画に対する姿勢が手紙に記されているので、ここに取り上げておきましょう。

大正四年六月六日、

「三脚几を携えて写生に行けば何だかまつ家らしくて(?)きまりが悪いけれど便利なのは至極便利で思う存分に描けます。どうしても三脚几だけはもたなければ其楽を極めることが出来ないやうです。此辺は画は概して盛んなところで画家と称するものが良く廻つてきます。……小生が只此等の画を描く人と異なる考を以て写生するのは(一)画に

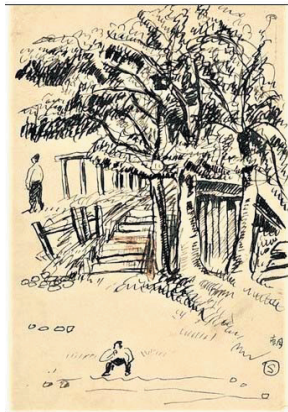
して容易さうなところは何處でもかまはず写生するのと(二)歩き疲れたところに三脚几を拡げてその辺をむやみに写生するのと二つです。良い画を作らうとは元より思ひません。写生せんと欲するものが写生出来たらそれが小生の満足です。」
という文が大きな樹が生える斜面に人が憩う画とともに書かれています。

大正四年六月六日(三十三歳)



三脚几を携へて写生に行けば何だかまつ家らしくてきまりが悪いけれど便利なこ

とは至極便利で思ふ存分に書けます。どうしても三脚几だけは持たなければ其楽を極めることが出来ないやうです。此辺は画は概して盛んなところで画家と称するものが良く廻つてきます。それから中学生がなかなか熱心でよく画きます。小生が只此等の画をかく人と異なる考を以て写生するのは(一)画にして容易さうなところは何處でもかまはず写生するのと(二)歩き疲れたところに三脚几を拡げてその辺をむやみに写生するのと二つです。」良い画を作らうとは元より思ひません。写生せんと欲するものが写生出来たらそれが小生の満足です。



それも後の文人画に役立ったのではないかと考えるのです。

これらが今回の考察で見えた主なことです。このように大正初期にかかれた絵手紙の中に、後の比庵芸術の原点が隠されていたことを確認したことは私にとって非常に大きな事でした。文人画ほどは注目されていないかもしれない絵手紙が実は比庵先生の重要な筆のスタートだったと思うと胸躍る思いを押さえられませんか。

小さな葉書サイズの絵手紙が偉大な比庵芸術へとつながったのです。元来よりその素養をお持ちであればこそでしょうが、葉書一枚を日々、大切にお描きになられた比庵先生だからこそ成し遂げられたことでしょう。

画の上手さを見せようというよりは、その土地の風物情景の面白さを伝えようとする比庵先生の純粹さとその事象の珍しさは、さぞかし葉書を見る人を惹きつけたことでしょう。実際、そのころは個人情報など気にされず、葉書というオープン伝達ツールは、通過する郵便局員や関係者の目にも留まり喝采を拍されたということも手紙に書かれています。この時代ならではの長閑なオープン・ギヤラリーを得て、筆への活力もさらに増したことでしようと思つて勝手な想像をしています。

四 絵手紙についての一考察

さて、この文頭に掲げた「絵手紙」の呼称ですが、時代時代で役目が変わりゆくのは仕方ないことなのではと思うようになりまして。

比庵先生の絵手紙と今の絵手紙、どちらも郵便物に変わりはないのですが、意味合いが変わって来たようです。今の絵手紙も「絵のある手紙」とされていますが、百年の年月を経て、その多くが先のように情報を伝えるというより、主に描き手の感動を相手の心にも響かせるということに変わってきたのではな

いのでしょうか。

今は情報に関しては映像も言葉も瞬時に伝えられる時代になり、葉書に求められるのは、描く人の心、気持ちやメインとなり、言葉の使い方も変わり、色彩豊かで相手の心を慰めたり、楽しませたりする絵が中心として描かれるものが多くなったようです。

志村先生のように、先の時代の絵手紙と今の絵手紙の違いに違和感を持たれるかたは多いと思いますが、実際、私もそうでしたが、どちらも時代時代に求められている絵手紙として受け止めたいのではと思うようになりました。

志村先生の違和感「絵手紙」という呼称に関するだけで、今の絵手紙を否定しているわけではないことを付け加えておきましょう。

「しかし、いずれにしても真女の絵は腕の進歩の程が見えて楽しい。個性豊かに發揮されてエンジョイヤブルだと思っています。いずれにしても面白く眺めています。」と、私が描いたものもそれなりに楽しんで下さっているのです。

この度の考察で、大正時代初期の「絵手紙」が基となり、やがて素晴らしい比庵芸術へとつながっていったのではないかとの大いなる観察結果を得て大変感動致しました。絵手紙人の一人としてとても嬉しく、憎悪ながらしつかり私も精進せねばと思わせていただけなことでした。そして、どの時代でも、そのスタイルは少々変わっても「絵手紙」が人の心と心に響き合い、豊かな日常を潤す種となりますように願っている次第です。

横手時代、青森時代、魚崎時代の比庵先生の絵手紙画像集を見せて下さった清水固氏、また、「絵手紙」の呼称と役割について、改めて考えさせて下さった志村正雄先生に心より感謝申し上げます。

以上

清水比庵周辺の人々と自用印

(一) 比庵と大本琢壽と『窓日』と

相模女子大学名誉教授
柿木原 くり

比庵自筆歌集『窓日』の刊行について、比庵年譜の多くが昭和三〇年の『窓日』と、三年の『窓日第二』の刊行二回についてのみ記述しているが、『窓日』は実は四回刊行されている。

『窓日』は彫版摺刷のすべてを担った大本琢壽（一八八五—一九七二）の精魂を込めた仕事である。筆者は琢壽の住持した高梁市有漢の齋帯寺にて、版木を拝見し、令孫大本一学住職よりご教示いただいたことなどふまえて詳細に記述をし紹介する。

一 『窓日』 昭和三十年六月廿日発行

著者 比庵 清水 秀
彫版摺刷並発行者 大本琢壽
発行所 比庵歌集刊行会
製本人 山中光圀
用紙製作者 平川村笠神・平井實夫
表紙題箋 「自筆歌集 窓日」
冊子寸法 縦24×横16.5×厚さ2センチ
発行部数 一六〇部（但し、『窓日第二』の「書後」において、大本琢壽は百七十部発行と明記している）
収録歌数
長歌一、短歌一五五首、その他彩色挿画（静物二、植物・動物各一、風景三）七点
附録活字本
「一会」橋本魚青・「偶然」清水比庵・「書後」大本琢壽（附録正誤表の日付は昭和三十年六月十五日）

橋本魚青との出会い

「一会」の文中橋本魚青（本名・富三郎・一八八六—一九五五）は、昭和二七年五月一日に日光の最勝寺書院の床の縣物、半截の書を一目して驚いた、と記す。一庭松のこずゑのうへの桜花こきとうすきといまさらなり 最勝院にまいりて 比庵」と読まれた、という作品について次のように語る。

歌はよくわからぬながら、素純で、直観的で、格調が高い。書は極めて超俗、蒼古で至妙、歌と筆の双絶、他に匹うべき人もない。只私の知る限りにおいて会津秋草道人一人あるのみである。（以下略）



廣大山・齋帯寺山門

一目惚れ、絶賛である。橋本は比庵なる筆者詮索は何の端緒も得られないまま岡山に帰着するのだが、九月初頭に比庵が高梁に展墓婦省との報を受け、比庵と面会がかない一見旧知の思いであった、と記している。魚青の文を読みながら確かな目を持つ文化人であることを認め、比庵との出会いの縁を喜ぶものである。

次に比庵による「偶然」の文から引用する。小生は計画したことに成功した経験がない、それでどうも人生の必然性ということに確信がもてないで、すべて偶然に生きているという仕合せである。芸術に於いてはこの偶然性が最も顕著である。

歌に於いても画に於いても、よく出来たものである。小生はこの芸術の偶然性を人生の偶然性にあてはめて、どうもすべからぬものかしらんと考えている。而して小生はこの老年になって、偶然性の傑作に廻合った。それは橋本さんと大本さんを知ったことである。

比庵は、山陽新聞社長であり岡山市長であった橋本が、よく書画を作り、又よく之を語り、岡山に於いて重きをなす人であることは承知していた。知りあつて、如何に物を見ることの出来る人であるか、を認識したと記している。

大本琢壽との出会い

そしていま一人の大本琢壽は高梁中学校・第六高等学校の後輩になる。琢壽の版刻の技等について前出の比庵の文中より要約しよう。

幼少時の手すさびに始まり、家が寺であつたのでお守りやお札など彫つて技に馴れた。昭和七年、備前西大寺出身の新人画家岡本月村の画稿を入手、画集を刊行し好評を得た。／琢壽は、比庵自筆歌集は原本を籠字に取つて版下を作り、原本と比較検討しながら制作を進めたという。また、琢壽は大正後半から昭和にかけて銀座の渡辺庄三郎の工房を訪れ摺刷を实地見学をし、同氏の紹介にて京橋で十四代続いた彫版業の宮田六左衛門を知り要諦を受けた。／戦災で何もかも焼けてしまったとき果敢自失したが、版刻に慰められたという。その刻技は大本さんの表情そのものとなつて居る。小生の書に興味をもち歌を楽しんで居られ、それが其刻技の表情と相俟つて非常によいものとなつて居る、と記している。

琢壽は「書後」の文中で、比庵に初めて遇

つたのは昭和二七年九月二日、橋本家に於てであり、橋本氏が琢壽版刻の「月村画集」や、秋草道人の自筆歌集「望郷」などを出して来られ、比庵が関心を持ったことが、比庵自筆歌集木版本への一歩となつたと述べている。ちなみに「望郷」は、「会津八一伝」（昭和三八年・吉池進）の年譜中に、昭和二一年一〇月・「望郷」自筆木版本岡山松坂庵僧上自刻私家版、と記載がある。帰庵は岡山法界院住職。画・歌・書に堪能で、書は会津八一に私淑し、親交があつた。昭和三四年八月没、六七歳。「望郷」は自刻私家版と明記。後年香川の八栗寺の梵鐘鑄造のため、八一に歌を依頼し、鑄型への刻は帰庵が担当している位、刻技にすぐれていた。

『窓日』発行に向けて大本琢壽宛に比庵の自筆原稿が統統と届く中、次のようなはがきも届いている。

二七年一月三日付琢壽宛はがき

比庵歌抄十二枚送ります。紙の都合で半紙より少し小さいものにかきましたが半紙に刷つていただいて悪くないと思ひます。どうもあなたと橋本さんを知つて小生の生活が非常に豊かな氣持になつて誠にありがとうございます。十一月三日

二七年一月一日付琢壽宛はがき

あとから秋草道人の歌を見ると、字にカスレが一つもありません。之はかくせねば版にはむつかしきものかと思ひ、別便で今一度カスレの無い歌抄を送りました。どうも小生の字はカスレで調子をとるのでカスレの無い字は出来がわるいのですが、それでも版にすればずつとよくなりますからかまいません。十一月十日 夕 比庵

比庵が琢壽に全幅の信頼をおいていることが確認できる内容だが、『窓日』刊行まで両

者のやりとりが頻繁に行なわれたことは、齋帯寺で拝見した琢壽宛のはがきの枚数からも推察できた。初対面から二年後の二九年九月二三日に、比庵は有漢の臍帯寺に入り、琢壽と二人二日間かけてカードによって百五〇余首の歌の配列を決定し、このとき『窓日』の題名も決った、という。

後日比庵はこのときのことを「山寺の秋蕭々とふる雨に障子をしめて山羊の乳のむ」と詠んでいる。

琢壽の「書後」は、比庵との出会いの日から『窓日』刊行に漕ぎ着けるまでの二年八月に及ぶ時を記している。比庵と琢壽は深い信頼を持ち合っていた間柄である。琢壽は睡眠時間を削って『窓日』に取り込んでいる。「書後」のまとめの部分を紹介しよう。

比庵先生の場合は三位鼎立（筆者注・歌書画）してその行く所極まりなしである。而して何とも言語に絶した健かさというもの、質実なるものを、換言すればわれわれに日本人の心の糧を与えらるることに深く感謝するものである。

この意味に於てこの書が大なり小なり比庵先生の高き芸能の一端を味読する人々に伝達する一助にもなれば私の願いは尽きるのであります。（以下略）

と記して、昭和二九年一月二三日岡山門田なる東山草堂にて、筆を置いている。別頁に、二九年も漸く暮れに臨んで漸く試験摺りを見るに至った、と記している。まさきによりやく肩の荷が軽くなったと推察する。しかし、これからの五ヶ月琢壽は黙々と摺刷に向き合ったのである。もとより手作業で、助手もおらず一人である。想像を絶する作業を進める琢壽に、橋本は健康を気遣って来ていたという。その橋本は『窓日』の刊行を待たずに急逝する。琢壽は奥付の余白に、次のような追記を書いて偲んでいる。

三春も過ぎ、世は青葉となり、あわたしく学会の行はれる時節となった。私も

仕事を中断して上京した。学会から戻って橋本さんに会ふことにして出発した。（中略）五月二日午前十時半橋本さんは脳出血で不覚の夢に陥られ、翌三日早天に不帰の旅に赴かれた。本書発行の大なる推進力であった大人に逝かれたことは誠に哀悼に耐えない。大人は明治十九年六月八日江州甲賀郡水口町の産。大学卒業後大原傘下に拔擢され幾多の要職を通じて全く県人になりきって最も大きい存在であり、師表であった。突如大人に逝かれ、転た敬慕にむせぶのである。（五月十五日）

琢壽と吉備考古学会

琢壽は東京帝国大学ではドイツ文学専攻（明治四五卒業）で、東北帝国大学、松江高等学校を経て、大正一三年三九歳で母校第六高等学校に着任している。昭和五年の第六高等学校職員姓名録には、独語・教授・評議員・文学士 大本琢壽（岡山）とあった。琢壽は昭和二四年新制岡山大学創立前に定年を迎えている。

大本琢壽は『窓日』刊行当時吉備考古学会会長を務めていた。そもそも琢壽は第六高等学校転勤一三年目の昭和一一年吉備考古学会の見学会に、同僚ケルベル氏と参加、以後関わりを持ったようである。一二年二月に発行された『吉備考古』第三号・拾周年記念号は、題字・法界院主松坂旭信（帰庵）師、表紙版・第六高等学校教授大本琢壽氏とある。同月二日開催の総会で琢壽は特別会員に推薦され、一四年一月には副会長に推薦されている。二〇年二月一八日の総会開催時にも琢壽は副会長と記され、このときの顧問に橋本富三郎の名が見える。

翌二二年二月二四日総会で琢壽は会長を引き受けることになった。「幸當時私は六高を去って医科大学に勤めていたので比較的時間

に余裕があった。昭和二二年一月発行の吉備考古第七十二号から万事引き受けた」と琢壽自身が記している。また、二五年度秋季総会に於て、日本考古学協会会員に推薦されている。そして三一年一月第九一號を以て『吉備考古』は終刊し、二月に新生三瀬戸内考古創刊号発行となる。琢壽は『吉備考古』に原稿を書き、裏表紙に彫版作品を掲載するなど、労をいとわず牽引につとめた。

琢壽の考古学上の一番の功績は、「笠神文字岩の研究」であろう。「吉備考古」第四八号（昭和一六年一月）に、史蹟笹神の文字岩（昭和一六年一月）に、史蹟笹神の文字岩（其一）第五〇号（同年七月）に（其二）を発表した。琢壽が昭和一四年以来三年に亘る前後三回の現地調査を行い、拓本を探り、読解をすすめ、これにより文字岩は、昭和二六年二月二日文部省史跡として指定をうけた。この論文は、文部省の「史蹟名勝天然記念物」第十六集第四・五号に掲載され、さらに、昭和三四年六月に、岡山県川上郡成羽村・成羽郷土史会から刊行されている。笠神の文字岩の碑文は徳治二年（一一三〇）丁未の刻である。吉備考古学会を通して、松坂帰庵や橋本魚青（富三郎）等との交流が深くなったであろうことは容易に推察できる。

彫版摺刷師としての琢壽

『会津八一伝』年譜中に次の記載を認めた。昭和三十年十月「観音堂十六首」木版本 大本琢壽刀 岡山松坂帰庵私家版

「観音堂」は昭和二十年十月歌詠、と記載されており、八一は高橋きい子が七月一〇日に亡くなった後観音堂で独居していた。吉野秀雄は「観音堂」一六首について、これらは「山鳩」の悲嘆につづいた観音堂における幽独の生活をありのままに叙したものが、私の好みに従えば、集中（筆者注・寒燈集）最高の作品と推すに躊躇しない、と述べている。その八一の歌を琢壽が刻している。『窓日』

を発行して続集の彫版が始まるまでの間に仕上げたと察するが、琢壽の技術の確かさを認めた帰庵の依頼であったろうか。

多忙の中、琢壽は比庵自筆歌集『窓日』の頒布にも心配りをしていたようで、「吉備考古」第九十号（昭和三〇年七月刊）には、◎一六〇部調整し予納予約の会員に頒布しましたが、意外に希望者多数のため中途打ち切りに致しました、と品切の知らせが掲載されている。

また、「吉備考古」第九十一号には◎自筆歌集窓日第二 予価千三百円送料七十五円 これは清水比庵先生の唯一の歌集である。先生は詩書画を兼たる稀代の大家である。装幀は川合玉堂。第一集は早く品切れ。第二集は三二年六月発行の予定、と予告し予約をすすめている。

『清水比庵の世界』（昭和五八年、窓日短歌会）に、自筆歌集『窓日』出来上ったとき比庵は満面笑みを湛えて「大本さんの版刻の腕前は、棟方志功さんと比べて劣らないどころか、かえって上だ」という評判が高いよと興奮気味に語ったとの記述がある。『窓日』により比庵の魅力が広く知られるようになった。

二 『窓日第二』

昭和三十三年一月十日発行

著者 比庵 清水 秀
彫版摺刷並発行者 大本琢壽
発行所 比庵歌集刊行会
製本者 山中光国（伝統的和装師）
用紙製作者 平井実夫 備中町笠神
表紙題箋 自筆歌集 窓日第二
冊子寸法
縦24×横16.5×厚さ2センチ
別冊附録活字本歌集
収録歌数 長歌二、短歌二〇首 扉絵・川合玉堂

※発行部数未詳

『窓日第二』では、自筆歌集 窓日第二別冊附録を制作し一帙二冊で頒布している。その歌集の末尾に琢壽は「書後」を記し、冒頭に昭和三十年六月二十日「自筆歌集窓日」を百七十部発行し、とある。『窓日』の発行部数が従来の記述百六十部と齟齬をきたしているが、発行当初の数字が正しいと推察する。また、『窓日』の再版は中止した、と明記し、既刊の『窓日』を『窓日第一』と呼び、『窓日第二』に向けて漸進する、と書いている。

『窓日第二』の比庵歌稿は三〇年一月、三一年一月・六月、三二年二月と次々到着する一方、「吉備考古」第九十一号終刊特集号（三二年一月）と重なり、琢壽は自筆歌集版刻に追従するには寝食の時を割くより外はなかった、と記す。三二年三月に版刻終了、四月学会で上京し比庵と打合せの後帰郷、一向に摺刷と取り組み時を忘れ専念、一二月一二日終了となる。

『窓日第一』は装幀川合玉堂の予定であったが、六月に玉堂が逝去したため扉絵のみが形見となった。比庵は「紅をもて」（昭和四四年、求龍堂



清水比庵 窓日第二 豊池美術店

の文中、『窓日第二』は別題にしようかと思つたが、玉堂先生が扉に円窓を画いて下さったので、窓日としたと書いている。そして、琢壽はせめてもと思ひ密着写真で山雨の図の一角を挿入、比庵の吊歌と共に玉堂を偲んだ。また、巻末に比庵の「茅

屋飛雀」を配している。

琢壽は、摺刷に際してはその用紙に強いこだわりを持っており、純粹和紙に対する木版の感触に忘却し難い郷愁を感じる私に取っては止むに止まない愛着でもあり、本能でもありません、と述べている。備中笠神産の楮で平井実夫による寒中手漉の和紙を使用した和装本『窓日第一・第二』を発行した琢壽、製本は当地に残る唯一の伝統的装束師の山中光国による四つ目綴で仕上げた。

『窓日第二』の発行部数は未詳である。

三 『窓日 第一 再治本並活字本一帙二冊』

昭和三十八年九月一日発行

著者 清水比庵

彫版摺刷 大本琢壽

発行所 岡山比庵会

用紙製作者 丹下哲夫（備中町清河内）

表紙題箋 自筆歌集 窓日第一

冊子寸法 縦24.5×横22×厚さ2.5センチ

収録歌数 長歌一、短歌一八七首

附録 活字本 ※発行部数未詳

「窓日第一」の附録（二会「橋本魚青・偶然」

清水比庵・「書後」大本琢壽に続いて、四

再治本についてとする琢壽の一文がある。再

治本とは再摺刷に当り若干の増補をし、活字

本を「窓日第二」同様別冊附録とした。長歌

一首はそのままで、短歌は三五首増えて

一八七首となっている。

用紙は、従来の半紙判を中折版と少し扯げ、

幾分楮の特色を残して純白ではない、と述べ

ダム底に水没する清河内での最後の製品とし

て、漉かれた品という。古人が写経には麻紙

を用い、経本印行には楮紙をと言ってきた言

葉の意味を痛感しながら、まるまる一年手摺

りに費やし、刊行が遅滞したと記している。

琢壽は、もともと『窓日』は第三集まで刊行

四 『窓日』家蔵本 昭和四十六年十二月発行

長歌一七首（反歌五首）、短歌一二二首を

収めた九〇部、版木は大本琢壽の彫りを用い、

製作は求龍堂。各々に自筆短歌一首を添え、

所蔵者名簿を別刷、と記されている。

この年、比庵は米寿、その記念もあったので

あろう。自筆歌集『窓日』の琢壽の版木を用い、

特にすぐれた作品を選んで装いを新たに刊行

されたが、比庵には、体調のすぐれない琢壽

をなぐさめる気持もあったようである。琢壽

は翌年七月八十八歳で逝去した。

大本琢壽は高梁市有漢にある真言宗大覚寺

派、廣大山・臍帯寺の三五代であった。現在

は令孫大本一学氏が止住しておられる。琢壽

は令孫大本一学氏が止住しておられる。琢壽

予定であった、と記しているが、多くの愛好家の希望を入れて『窓日第一』の再治本という形で、一〇年を越えた比庵自筆歌集の彫版摺刷の仕事を終えたのである。ところで、「窓日」の語は、良寛の詩「空階花狼藉／好禽語如織／遲遲窓日麗／細細烟直」の三句目から採ったと言われている。窓辺の日射しはどうかにうらうらと、まさに比庵の人柄のような、と思う語である。

『自筆歌集 窓日』関連は三度の刊行をもつて完結かと思いきや『清水比庵作品集』昭和五三年、朝日新聞社）や『比庵百華』（昭和六三年、清水明子）等の年譜中に、筆者未見の『窓日』記述を認めた。

は、父方の大叔父にあたる三三世・大本英学遷化の後、大本家再興の形で養子となつていると、一学氏より伺つた。臍帯寺は元は細尾寺といひ、聖武帝の神龜三年五月行基の開山とされる。

臍帯寺の梵鐘は口径七三センチ、高さ一一五センチ、重量三七五キロで昭和三六年一〇月七日搬入、翌年四月一四日新鑄供養。梵鐘には一行六字で八行に、比庵がいろは歌を平仮名で丁寧書いている（四六頁掲載）。鐘面の反対側には、「願文」として本文が一行一字で九行、落款二行が書かれているので、全文を紹介する。

當山の梵鐘は先々代英學／上人獨力發願する所の稀／に見る名鐘なりしが戦時／に供出せり年経て茲に善／男女人同心戮力その再興／を畫しこれを越の名匠老／子翁に託す願くは妙音廣／く群生に響き永く華藏界／曾の發現せんことを

昭和三十六年春時正／廣大山廿五代琢壽敬白

鐘銘の、文字は一切比庵清水秀先生にお願いたしましたものである、と記している。

「窓日」五四年四月号に、比庵師のいろはを刻む山寺の鐘の音やさし沢をめぐりて、という大本晴子（琢壽・令息の室）の詠歌が掲載されている。筆者は臍帯寺を訪れたが、鐘の音は聴いていない。しかし、この歌によりあんなつかしいおだやかな山里に響く妙音を想う。

臍帯寺廿五代大本琢壽は、昭和四十七年七月一七日遷化、後、大覚寺より「権大僧上」を追贈された。琢壽没後四七年の昨秋臍帯寺を訪ねた折、山里の田の稲穂の黄金色と畦の赤い彼岸花の美しく、山門近くの金木犀の老木の放つ香り、周囲には秋明菊が咲き競う光景を、琢壽も見ておられたかと眺めたことであつた。

以上



臍帯寺梵鐘のいろは歌と願文

以上

比庵翁の思い出と万葉歌碑

奈良県生駒市 吉田 耕一

(清水 固の従弟)

清水比庵翁(明治十六年二月八日生、昭和五〇年一〇月二四日没)が亡くなられて四五歳の歳月が経過して生前の姿をご存じの方も少なくなってきました。

一 学生時代の思い出

比庵翁の娘婿の尚氏が私の母の兄にあたり、私は学生時代に一〇か月ほど尚伯父・明子伯母のお世話になり駒込の家で比庵翁と生活を共にしました。清水固氏は従兄、ワーズン充子さんは従姉にあたります。

この時比庵翁が率先して好意的にアレンジしてくれたことを後年聞き、家族全体の暖かさを感じて、私は清水家の六番目の子供と自称し、今でも清水家のイベントには可能な限り参加しています。一緒に生活したのはごく短期間でしたが比庵翁の思い出を少しだけ記してみます。

清水家で私の役割は学校帰りに比庵翁のおやつ(不二家のアップルパイ)を買ってくることでした。いつも飽きずにおやつはアップルパイを食べていました。比庵亡き後明子伯母の代にもこの習慣は続きました。

思い出の中で一番面白かったのは昭和三八年一月に豊島区役所から比庵翁に成人式の招待状が届いたことです。コンピュータ管理のなかった時代で担当者が住民票台帳で「明治」と「昭和」を読み間違えて招待状を発送したため、比庵翁(当時八〇歳)は大層喜んで「成人式に出かけようかな!皆が驚くぞ!」と喋って大笑いをしました。

電話と来客が多く比庵翁の誰にでも気軽にやさしく接する人柄が惚れました。弟の清水三溪氏がしばしば訪れるのは当然としても、来客は中年の女性が多く、「こんにちは! ××です。」と言って玄関に入ってきて案内

ありがたやありがたやた
ありがたやたありがたや
ありがたやありがたや

喜寿 比庵



も請わずにさつさと二階に上つていく女性もおりました。比庵翁は本当に女性によくモテました。

昭和二十二年に一二〇万部売り上げた「肉体の門」のベストセラー作家田村泰次郎氏が来訪された時には、帰られた後に「彼の作風と私の歌には何の接点もないのだが」と不思議そうに話していたこと覚えています。田村氏は作家であると同時に美術評論家連盟に所属する絵画愛好家で、比庵翁の書画に魅せられて会いに来られたのでしよう。比庵翁が「肉体の門」を読まれたかどうかは聞いておりません。先年岡山市の遍照寺法界院の境内の道端にあるちっぽけな石碑「ありがたや」を見た時に比庵翁の何時もの温和でやさしい笑顔を思い出しました。大きな声を出したり、怒っている姿は一度も見ることがありません。何時もニコニコ笑顔で今様の「良寛さん」と言われた由縁です。

二 虎の子の絵

私が結婚して長男、次男が生まれた時に、それぞれお祝いに書画を描いてもらいました。二枚とも虎の子の絵と歌の入った作品



虎の子 比庵 87歳と90歳

ですが、明子伯母は「比庵が虎の絵を描くのは珍しいのよ。」と言って祝ってくれました。私も比庵展でいろいろ作品を見ていますが虎の子の絵を見たことはありません。

男の児やえらくなるべしにしへ人におとらずえらくなるべし 比庵八十七
男の児やもむなしかるべきいにしへの人におとらず名をしたつべし 九十比庵

三 記・紀万葉集の歌碑(聖林寺の歌碑)

奈良県桜井市の記・紀万葉集の歌碑については、桜井市が「万葉集のふるさと」、「日本最古の道」といわれる『山の辺の道』を開発から守るシンボルとして歌碑を建てることを決め、池田栄三郎市長、米田一郎観光課長、地元出身の文芸評論家保田與重郎が中心となつて取り組み、当時の文化人三人名の揮毫により建てられたものです。

昭和四十七年十一月に三九基の歌碑、四基の道標(井上靖・小林秀雄揮毫)が完成し、大神神社(オオミワジンジャ)大和の国一之宮(通称:三輪明神)ですべての歌碑の写真を並べて総合歌碑除幕式が行われました。周囲の風致を壊さぬようにいづれも小さな自然石に刻まれた歌碑や道標で、現在では山の辺の道を中心に六二基の歌碑、四基の道標が桜井市内の各所の路傍にあります。

保田與重郎と親交のあった比庵翁も揮毫を請われて、聖林寺山門の横に歌碑が建てられました。万葉集巻三号二九〇番 間人宿禰大浦(ハシヒトスクネオオウラ)

椋橋(クラハシ)の山を高みか夜ごもり
に出てくる月の光ともしき

*歌の意味

椋橋(倉橋)の山が高いからだろうか、夜も更けてからやと姿を出してくる月の光はなんと弱々しく乏しいことよ。

(注)倉橋の山とは談山神社(中大兄皇子と藤原鎌足が「大化の改新」の話し合いをした

神社)がある多武峰(トウノミネ)に連なる竜門ヶ丘連峰の山で、現在は音羽山(八五二m)と呼ばれていて、歌碑は倉橋山の方向を向いて建てられています。この歌は桜井市が割り当ててきたもので、比庵翁にとつて万葉集の中で特別に残っている歌ではなく「椋橋の山」と揮毫しました。市からの原稿には「倉橋の山」と書かれてあり、調べたら「椋橋の山」が正しいと分かり、依頼するならばちゃんと調べて原稿を渡すべきで不愉快であつたが、自分が正しかったのでホッとしたそうです。保田與重郎は自書万葉集名歌釈で「夜ごもり」は夜更けの意味で、月の光を主題として解釈するのではなく、倉橋山と夜を主題として解釈するべき歌で、倉橋山は大和の国原から見ると堂々と重々しく見えて、昼間見るとたいしたことがなくても、月の夜に見ると落ち着きや重量感を感じられる山で、その凛とした月夜の姿を歌った名歌であり、「神(カン)ながら」といわれる清浄無我の心境が湧き出てくると書いています。

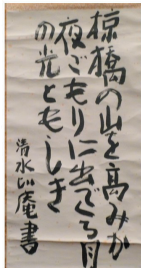
比庵翁は除幕式に出席した折に聖林寺を訪れて わが書きし万葉歌碑の聖林寺
椋橋山の月の見ゆるはなし
と色紙に書き贈り、後からこの歌の連作として いしぶみの椋橋山の夜ごもりの
月の眺めは聖林寺にて
と詠んだと随筆「駒込だより」に書いています。

聖林寺は真言宗室生寺派のお寺で、七二二年藤原鎌足の長子・定慧(ジョウエ)が建立したと伝承される古刹です。本尊は大きな石頭の地藏菩薩で、国宝十一面観音菩薩像があります。この菩薩像はもともと大神神社の神宮寺・大御輪寺にあつたものですが、慶応四年から明治元年に出された神仏分離令で聖林寺に移されたものです。

岡倉天心とフェロノサが「奈良の小さな山

標橋の山を高めか夜こもりに
出て来る月の光ともしき

清水比庵書



寺にこんな
素晴らしい仏
像があるとは
……と言つて
驚いたという
逸話がありま
す。

昨年東京国
立博物館で二
宝聖林寺十一
面観音像と三
輪山信仰のみ
ほとけ」と
いう表題で開
帳される予定
でしたがコロナ禍で中止となり、今年六月
二十二日から九月二十二日まで改めて開帳さ
れる事になりました。そのため聖林寺で拝観
可能なのは五月九日までです。

歌碑の揮毫者の中に川端康成もいました
が、昭和四十七年四月一六日に自死したため
ノベル文学賞受賞記念講演の原稿「美しい日
本の私」から文字を拾って拡大し揮毫に変え
て原書を作り歌碑を建てたという話がありま
す。

古事記 倭建命(ヤマトタケルノミコ)

大和は国のまほろば たたななく

青垣山ごもれる大和し美し(ウルワシ)

保田與重郎については前号で柿木原くみ先
生が詳しく書かれておられますが、顕彰碑が
聖林寺近くの安倍文珠院の境内にあります。
また滋賀県大津市の街中にある小さな義仲寺
に保田與重郎のお墓(分骨)があります。義
仲寺は名前の通り木曾義仲と巴御前のお墓が
あるお寺で、更に松尾芭蕉のお墓もあり、境
内に句碑がたくさんあります。保田與重郎が
戦中戦後の混乱で荒れ果てた義仲寺の復興整
備に尽力したのでお墓があるのでしょう。

平成二六年十一月に桜井市が記・紀・万葉
集歌碑の原書展を開催し、固氏の代理として

開会式に出席して比庵翁の原書を参観しまし
た。あまり保存状態は良くありませんでした
が表装されており、今では桜井市の文化財と
して保管されております。

比庵翁の味のある書体に魅せられたのか、
昨年ある拓本展できれいに歌碑を拓本した作
品を見ました。

四 大神神社「額田の王の本歌/反歌」

大神神社に奉納された大額についての経緯
は先月号に記載されています。

この大額に書かれた額田王の本歌(万葉集
一卷一七号)、反歌(万葉集一卷一八号)は
ともに新感覚派の小説家・歌人の中河與一の
揮毫により、歌碑一号として山の辺の道の天
理市と桜井市の境にある景行天皇御陵の横に
建てられています。

大額は大神神社大札記念館の広間に掲げら
れており普段は公開されていませんので、拝
観を希望されるのであればあらかじめ社務所
に問い合わせるほうがいいでしょう。

奈良を訪れる機会があれば「万葉のふる
さ」と「桜井市まで足を延ばされるのはいか
がですか。」と奈良駅から桜井線まで
三分、駅からタクシーで聖林寺へは南へ
一分、大神神社へは北へ一分です。長谷
寺も近くにあります。

以上

編集後記

昨年からコロナ禍で「比庵佳境の会」の
活動も制限され、清水比庵展は開かれておら
ず今年も首都圏では期待できません。併し会
報は春・秋二回発行しており、比庵のふるさ
と岡山県では今年に次の様に幾つかの催しが
企画(決定)されていますので紹介します。

一 清水比庵展

・金光図書館比庵展(〒719-0111岡山県浅
口市金光町三二〇、電話 0865-42-2054)

金光教第四代教主金光碧水氏は文化人で書
と歌に優れ比庵と親しい交際をしており、金
光家には比庵の作品や手紙類が多く残ってい
ます。そこで来る四月三日(土)から一年間
金光図書館で比庵展を開催することが決定し
ました。金光家所管のものが主体なので、初
めて観る作品が多いと思われ楽しみです。

・十字屋教育財団比庵展(岡山県真庭市鹿田
三二一、☎0867-42-3008)

岡山県真庭市の実業家牧生夫氏が代表理事
をしている十字屋教育財団で今年一〇月から
迎賓館で比庵展を開催します。牧氏は比庵フ
アンで「比庵佳境の会」の会員でもあり、過
去にも比庵展を開催しています。御期待下さ
い。

・原田文学館比庵展(岡山県浅口市鴨方町六
条院一〇五二一、☎086-1239-0320)

将来を嘱望されながら二九歳で戦死した浅
口市出身の歌人原田進の足跡顕彰のため、教
育者であった父親原田林氏が建設したおか
やま山陽高校の敷地内一昨年建立されまし
た。此処で本年九月二七日(月)から半年間
比庵展が開催されます。比庵は地元の人
の一人なので、文学館関係者が尽力して開催
の運びとなりました。

二 清水比庵に因んだ新酒「水清き」発売

比庵の母と妻の実家笹
田家があつた有漢町(現
在高梁市に合併)に
ある大正七年創業の老舗
「芳烈酒造」が、今年の
新酒に、比庵が詠んだ歌
(高梁資輔峠の歌碑)

水清き川の流れて山
高し日は山を出で川
をわたるも

の「水清き」と命名した
純米吟醸を四月五日(月)
から販売します。酒瓶に
は比庵の風景画高梁川の

コピーを貼ります。詳細は同封別紙をご覧下
さい。購入ご希望の方は同封別紙記載の芳烈
酒造にご注文下さい。

三 比庵大賞

比庵の生地岡山県高梁市の比庵会(高梁比
庵会)は平成十三年に清水比庵大賞(短歌の
部)を創設、全国から短歌の公募を始めまし
た。以後隔年ごとに実施し最近は一昨年(令
和元年)に開催しています。次は今年の予定
で、正式には五月ころ制定されます。その内
容は従来と同じとすると次の通りです。詳細
は事務局にお問合せ下さい。

募集期間…七月一日〜八月三十一日
募集作品…未発表の短歌二首を一組とし、
複数組可

投稿料…二首一組で一〇〇〇円(十八歳以
下高校生は五〇〇円)

選者…窓日短歌会
賞と賞品…比庵大賞(一名)三万円、特
選(二名)各二万円、奨励賞(三名)各
一万円、入選(三〇名)記念品、参加賞(全
員)第十一回作品集

問合せ先…〒716-0033 岡山県高梁市原
田北町一〇三二一 高梁市文化交流館内
清水比庵大賞事務局、☎0866-21-0180

会費納入のお願い
令和三年度会費を下記に納入されます
ようお願いいたします。
一口、1,000円(複数口歓迎)
三井住友銀行 鶴見支店 普通
7061558
名義 クボタノブユキ
なお現金で会長「清水固」宅(下記)
に郵送されても結構です。

比庵佳境の会

会長 清水 固(清水比庵の孫)
〒247-0022 横浜市栄区庄戸 3-5-18
TEL&FAX 045-893-8932
携帯 090-6340-0181
メール katashi-shimizu@hat-hi-ho.ne.jp
URL:http://www.hat-hi-ho.ne.jp/katashi-shimizu/
幹事:比留間 哲生
〒247-0022 横浜市栄区庄戸 3-25-7
TEL 090-4608-0488